

がん薬物療法とは

「抗がん薬」の投与によって、がん細胞の増殖を阻止する治療法です
目的は ①完全な治癒 ②生活の質（QOL）を維持しながら
延命や症状を緩和することです



**副作用の早期発見と治療が重要です
気になる症状があれば我慢せずに相談を！**

がんの種類や病状に応じて
治療法が異なり
副作用も薬の種類で異なります
また、すべての副作用が
現れるわけではありません
自覚症状がなくても、
検査で異常が見つかることもあります
副作用を早期に発見し、適切に対応することが
重要です
医師、薬剤師、看護師などが副作用の軽減に
努めますので
違和感があれば、
早めにお知らせください



主な分類	作用
細胞傷害性 抗がん薬	細胞分裂が盛んであるがん細胞に作用する薬 正常細胞にも作用し、副作用として出現する
分子標的薬	がん細胞に特異的な分子レベルの特徴をターゲットに 作用する薬 同様の分子をもつ正常細胞にも作用し、副作用として 出現する
免疫チェック ポイント阻害薬	人が本来持っている免疫の力を回復させてがん細胞に 作用させる薬 免疫機能が過剰に働くことで正常細胞にも作用し、 副作用として出現する
ホルモン療法薬	ホルモンを利用して増殖するタイプのがん細胞に 作用する薬 ホルモンの欠乏による症状（更年期障害など）が 副作用として出現する

点滴投与時の注意する副作用（①～③の症状を含め、違和感があればナースコールでお知らせください）

①血管外漏出	抗がん薬を点滴で投与する際、刺激や血管のもろさにより、薬が血管外に漏れ出すことをいいます 薬の種類により、痛み、発赤、腫れ、酷くなると水膨れや潰瘍、壊死を起こすこともあります 血管外漏出が発生した場合、抗がん薬の種類に応じた処置を行います 点滴中では以下にご協力ください A. 看護師が腕の観察や声かけを行います B. 点滴中は腕をなるべく動かさず、安静に過ごしてください C. トイレは投与前に済ませておくといいです クッションなどが必要な場合は、 看護師にお申し出ください	点滴中には以下の症状に ご注意ください
②静脈炎	とくに細い血管では血管にそって発赤やむくみ、 血管の痛み（血管痛）などの静脈炎を生じることがあります 予防としては、点滴前に温罨法を行い、 太くまっすぐな血管を探す工夫を行います 血管が細くて点滴が難しい場合は、 皮下に埋め込み型ポートを使用する方法もありますので 医師にご相談ください	・針の挿入部周辺の痛み、腫れ、発赤、 違和感 ・テープの剥がれ ・点滴の滴下不良 など
③過敏症	薬が投与されると、生体の防御システムが過剰または不適切に反応し さまざまな症状が起こることがあります 点滴中には以下の症状にご注意ください ・発赤、かゆみ ・息苦しさ、咳、くしゃみ ・冷汗、寒気、発熱 ・吐き気、腹痛 など	

点滴後1週間ほどは腕の様子や
体調を確認しましょう

ご連絡
いただきたい
状況

- 点滴した腕が赤く腫れて痛みがある時
- 全身にじんま疹がでてきた時
- 呼吸困難感、息苦しさがでてきた時 など

TEL. 078-261-6711

平日（8：30～17：00）⇒ 各診療科が対応

時間外（17：00～翌8：30）及び土・日・祝日⇒ 救急外来が対応

社会医療法人神鋼記念会
神鋼記念病院